九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

比喩が批評すること ： 『尾形亀之助全集』未収録資料の紹介と考察から

岩下, 祥子
九州大学大学院比較社会文化学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/27414

出版情報：九大日文. 20, pp.2-22, 2012-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

比喩が批評すること

――『尾形亀之助全集』未収録資料の紹介と考察から――

岩下　祥子（IWASHITA Shoko）

はじめに

尾形亀之助の著作は大正七年二月「FUMIE〈踏絵〉」に発表された短歌を最も古いものとして、昭和十七年九月「歴程」に寄せた散文詩「大キナ戦（1　蠅と角笛）」までが確認されている。発表年月順に作品を並べると、文筆活動が後期に進むに連れ、シナリオ、随筆、掌篇小説、評論等、詩作品以外の散文作品が多く発表されていることが判然とする。散文調の作品は詩作品に比べ『尾形亀之助全集』[1]（以下『全集』と略記）から散逸しているものが多い。本稿で紹介する二点の『全集』未収録作品も散文で書かれたものである。散文調の作品は詩作品と「詩」（詩想）の表出の仕方が異なり、尾形亀之助の「詩」を捉える試みにおいて多角的な視点をもたらす、重要な資料であるため、紹介を兼ねた考察を行いたい。本稿中、資料または引用文の仮名遣い、おどり字などは原文どおりとし、旧字体は新字体に改めた。資料は区別するためにA、Bと打っている。先に資料Aを掲載する。

『尾形亀之助全集』未収録資料A

「日本英傑伝抄と野村君」と私

（日本英傑伝抄と野村君）の改題

尾形亀之助

「日本英傑伝抄と野村君」といふ一文はうまく書けなかつた。「日本英傑伝抄と野村君」といふ題は、私にはむづかしすぎたのだつた。でも、この奇妙な失敗は私のせいではないやうな気がする。ペンがわるいからだとか。電灯が暗いせいだと言ふことが出来るといゝのだが、そんなことにしても（ママ）しまふにはあまりに読者は賢明である。

×

私は次のやうなことを書いたのであつた。……何の説明するところもなく（説明困難のため）「日本英傑伝抄と野村君」を一つの真剣さと言つてしまつては、私は後々までさう言つたことを気にしなければ（ママ）なるまい。で、私は字そのまゝの意味で真面目さと言はふ野村君は「日本英傑伝抄」を熱いやき芋を口に入れたときのやうな何物かをもつて書いてゐるのか。氷水を口に流し込んだときのやうな何ものかをもつて書いたのかは私にはまるでわからない。

しかし、いたづら半分書いたものとは思へない。又、あのやうな方法で日本英傑をひやかしたものともとうてい考へることは出来ない。それでは一つの気分を書いたものだらうか。信長

が馬に乗つて偉つた。と。

信長と野村？。野村君のどこかに信長の風采があるやうな気がする。こんなことを言ふと、野村君は苦笑するだらふと思ふ。さふ思ふと、私ももらひ笑ひをしてしまふ。と。

……野村君は正面を見せない。昨日神田で君に出逢つたが、君は僕を見つけなかつたやうだ」と、私が野村君に言つたとすると。野村君は「誰が歩いてゐやうと天下の大道だ。気にしなくともいゝではないか」と簡単に言ひさうだそんな気がする。だが、私は一度も路で野村君と出逢つたことがない……と。

又、野村君の足——下駄をはいて歩るいてる足が、私などの足とは大変異つてゐるやうな気がする。どういふわけなのか、野村君の足は野村君から独立してゐるといふ気がする。丁度私達が汽車にでも乗つてゐるやうに。野村君は足に乗つてゐるといふ風に——。と。そして、こんなことを言つてゐると、野村君が変人だといふことになつてしまふだらう。だが、その前に私の方が先に変人だといふことになりさうだ——と。

×

こんな風で、私は何を書かうとしてゐるのかわからなくなつてしまつた。書いてゐると野村君は姿を消してしまう。三角形の太陽の日本英傑伝抄をむづかしく言ふ必要はない。又、それを言ふために書き初めたのではなかつた。

私は魚のゐさうなところへ糸をたれた。世の中の一番馬鹿が釣をする人とある。読者には気の毒だ、魚が釣れなかつた。

【掲載誌】

「太平洋詩人」（ミスマル社）第二巻第三号、一九二七年（昭和二年）三月、四〇～四一頁

※資料は「（日本英傑伝抄と野村君）の改題」までがタイトルであるが、原文通り活字を小さくして表記した。本文三行目「この奇妙な失敗はわたしのせいでは」の傍点は原文では「せ」と「い」の間と、「で」に付されているが、ここではその後の「暗いせい」に倣って「せい」に付した。第五段落二行目のカギ括弧は閉じる括弧のみ。

資料Aについて

「「日本英傑伝抄と野村君」と私（日本英傑伝抄と野村君）の改題」（以下、必要な場合を除き丸括弧以下を省略）は「太平洋詩人」第二巻第三号の「市街戦」という掲載枠に発表された。「太平洋詩人」同巻同号には尾形が書いた小説「北海道の旅」も「創作」欄に組まれ発表されているが、この作品は増補改訂版『全集』の巻末に「補遺」として収録されている。「市街戦」は詩人や詩集、或いは「詩壇」に対する批評が主で、他に執筆者の芸術観を明示した評論等が掲載されている。「太平洋詩人」には「評論・感想・随筆」という掲載枠も別にあるが、特定の詩人、詩集を取り上げている批評文は「市街戦」に組まれているものが多い。

「野村君」は、尾形と同時代に活動した詩人、野村吉哉[2]を指し、「日本英傑伝抄」は野村の第二詩集『三角形の太陽』（ミスマル社、大正十五年六月）を構成する六つの章のうち巻末に位置する章である。前号に当たる「太平洋詩人」第二巻第二号（昭和二年二月）に尾形は小野十三郎の詩集への批評文「詩集「半分開いた窓」私評」を寄せている。末尾の「備考」に本文より小さな字で「この次に野村君の「三角形の太陽」を日本英傑伝抄を中心にして何か書いてみたいと思つてゐますが、私のを読んでも面白くないと思つたら注意して下さればたゞちにやめます」[3]と書いているので、『三角形の太陽』に触れているという点においては「「日本英傑伝抄と野村君」と私」は予告通りに執筆されたことになる。

野村吉哉の詩の読まれ方には、難儀が付随している。『三角形の太陽』発行時も「其詩が吾々に与へる感じは余りにラツフである。否！ラツフであると云ふ事はまだゆるせるとしても、余りにプロザイツクである」（林新一「明窓雑筆――『三角形の太陽』をよむで」、「扉」第一巻第六号、大正十五年八月）、「野村氏がもつと自己を掘下げて近代の社会生活を突つめて考へていつたら、氏の心境は一弾の飛躍をとげるであらうと思ふ」（倉橋彌一「新人の詩集を読む」、「炬火」四号、大正十五年八月）といった評に見られるように、奇抜さが新しい趣として受容されると共に、粗雑で深みを欠いた印象を読者に与えている。「日本英傑伝抄」でもその特質が顕著となっており、それ故にこの作品群が野村の詩作品の中で軽んじられていることを岩田宏は指摘した。

初めに書いた通り、この詩人の作品は生前と死後の二度、アンソロジーに収められたが、問題は二度目のアンソロジー（「日本現代詩大系」第八巻〈河出書房、昭和二十六年十一月――引用者注〉）である。そこに収められたのは「求むる部屋」「夕闇から」「ガキの死」「茶碗を恋ふ」など、一見「リアル」だが実はフィクション化の意識が濃い詩的生活スケッチが主であり、フィクション化があらわな童話的作品や空想的作品は僅か二、三篇しか入っていない。怪奇小咄や、ナンセンス詩や、あの「日本英傑伝抄」は全く無視されている。[4]

「実はフィクション化の意識が濃い」詩と、「フィクション化があらわな」詩は、似て非なるものであり、作者の詩作意識はまったく異なるものであっただろう。飛高隆夫も『日本現代詩大辞典』（桜楓社、昭和六十一年二月）の中で野村について「詩は貧窮生活の悲しみを投げやりな口調で表現し、虚無的な感情を漂わせているが、第二詩集では歴史上の英雄を諷刺的に表現した構成詩に特色を示した」と述べており、「日本英傑伝抄」を野村の評価すべき「特色」として見ている。岩田は「プロレタリアートからも空想や幻想、超現実やナンセンス、時にはモダニズムさえ生み出されかねないという事実」が、「自然主義的プロレタリアしか認めまいとする傾向」に黙殺されることを「誤り」とし、その反抗を野村が「身をもって示している」と主張

した。しかし、諧謔的な詩作品に野村の役割を見出す言説が生まれるのは後世になってからのことである。

比喩の読解と「改題」の意味

「日本英傑伝抄」は「加藤清正のアゴ髯」から始まり、「豊臣秀吉と淀君」を間に挟んで、資料Aで尾形が触れている「馬上の織田信長」が並ぶ。二篇をここに掲載する。

加藤清正のアゴ髯

――アイタ！　タツ！　タ！
深夜に及んで聞えてくる悲鳴……
タシカニ主君の寝室よりと覚えたり

――ハテ？　何事ナラン！
腰なる両刀ニギリシメ
一散に駆け付けたるは宿居の侍である
……肥後熊本本丸奥深く
夜もたけなはナルに突発したる大事件
駆けつけたる侍は
やがて何を発見したのか――ウヘ　ウヘ……と笑ひくづれた
――サテモ怪奇シゴク！
今や眠れる清正公の顔近く寄りて
白き髯にすがつて泣ける二匹の若き鼠……
ハカナキ恋のかなしさに
清正公のアゴ髯で首をくくつて心中しようとしてゐるのだ！

……ヤガテ清正も目を覚して
この有様を発見して笑ひくづれた
――ウヘ　ウヘ　ウヘ……
家臣達も一緒になつて笑つた
深夜のしゞまを破つてしばし哄笑がつゞいた……

※ダッシュ記号を重ねる表記は原文通り

馬上の織田信長

『ナント俺の威勢のスバラシサ！』
信長は馬上ゆたかに進ませながら
ニヤリニヤリと笑つたことである
……驚偉のマナコをそばだてる見物人！

天正九年春なほ寒き二月
彼は騎馬大演習を催したのである
……近畿に彗星のごとく奮起した彼

まづ群雄の寒からしめようと胆寒からしめようと
兵馬をあつめてコノ示威運動ナノサ……

『天下の諸侯共も
俺のスバラシサに降伏することだらう
浪人共も家来になりたがらう
……テモ俺の頭のヨサ！　ウフフフ』

きらびやかな侍共の鎧の光に
面喰つて暴れる栗毛の愛馬
その背中に噛りついて
彼はユウゼンと閲兵したのである

（二篇ともに『三角形の太陽』、ミスマル社、大正十五年六月）

岩田宏は野村吉哉の作品に「時折ちらと現れる或る種の微かなゆがみ、ひずみ、ねじれのようなもの」が見られることを指摘している。『三角形の太陽』の巻頭の章「救世主物語」ではキリストとマリアの母子相姦に仏陀を加えた三角関係が描かれている。仏陀の手によって「宿場女郎にたたき売」られたマリアを「金さへあれば／大びらに　自由に　おふくろを買ふことができるやうになつたのだ」と弟子達と堂々と「買ふ」キリストの描写から「ときどき仏陀一行とのサヤアテもあつたが／彼等には燃ゆるがごとき人類愛があつた」と結ぶ。「英傑」や「救世主」から伝説を抜き去り、その代わりに煩悩や虚栄心、間抜けさを付して道化とするあたりには「ひずみ」や「ねじれ」が認められるだろう。更に「人類愛がある」、「ユウゼンと閲兵したのである」と本来の世評に返す締めくくりの皮肉には、説明困難な「或種の微かなゆがみ」を感じ、そこに野村のプロレタリアートとしての態度を見出し得るとも言える。壺井繁治は「文藝時報」に寄せた『三角形の太陽』の鑑賞を「真面目なやうでどつかフザケたところがあり、フザケてゐるやうで真面目なのが、彼から受ける一つの強い印象である」と、野村の人物評から書き始め、滑稽味に頼って浮遊する詩を鋭く批判した。

彼の詩を読むと、どんな鹿爪らしい人間でも一度は笑はずにはゐられないだろう。と同時に、どんなフザケた人間でも、また一度は自分のフザケた姿を反省せずにはゐられないだらう。それほど、彼の詩にはこの相反した二つの気持が微妙に交錯し、融合して、そこに独特な一つの世界を展開してゐる。然し時にはあまりにフザケ過ぎて、それが単なる笑ひに終つてゐるものも少なくはない。『日本英傑伝抄』と云ふ最後の章では、加藤清正や、豊臣秀吉や、淀君や、織田信長や楠木正行や、石田三成や、新田義貞や、その他の英雄豪傑が、作者の軽い筆致でカリケエチユア化されてゐるが、これは一つの試みとしては確に面白ひに違ひないが作者が自分の興味に溺れすぎたやうな傾きがあつて、僕としてはあまり賛成出来ない。『加藤清正のアゴ髯』などは、実際腹を抱へて笑はすだけの可笑味があるが、単

にそれだけのものである。[5]

壺井の文中に繰り返される「真面目」と「フザケ」の指摘は、資料A中の尾形の「野村君は「日本英傑伝抄」を熱いやき芋を口に入れたときのやうな何物かをもつて書いてゐるのか。氷水を口に流し込んだときのやうな何ものかをもつて書いたのかは私にはまるでわからない」という表現と呼応する。あるいは尾形は「日本英傑伝抄」の定まりどころのない滑稽味が、脇目もふらぬ情熱と革命意識で書かれたのか、貧困と病魔を抱える冷ややかな眼差しで書かれたプロレタリア詩であるのか、思いあぐねていたのかもしれない。詩境の摑みがたさへの指摘は「……野村君は正面を見せない」で始まる第五段落まで及んでいる。「正面」とは読者に訴えかける「詩」を指すであろう。「ナンセンス」を体現する野村に文中で「誰が歩いてゐやうと天下の大道だ」と言わせ、尾形が「だが、私は一度も路で野村君と出逢つたことがない」と放つ、この段落は比喩で婉曲になってはいるが、批評文における「日本英傑伝抄」への否定的な態度を明瞭にしている。

第六段落では、「足」を更に「汽車」に例えて比喩に内在する批評内容の説明を自身の言葉で試みており、尾形の主意が凝縮されていることを推察する。「汽車」に見立てられた「足」は何を指すであろう。尾形の第二詩集『雨になる朝』（誠志堂、昭和四年五月）に同様の比喩表現が見られる詩篇がある。

昼の街は大きすぎる

私は歩いてゐる自分の足の小さすぎるのに気がついた
電車位の大きさがなければ醜いのであつた[6]

尾形が「街」を「昼」という語と共に書く詩は他にない。状況として昼が推察される詩はあるが、尾形の「昼」は「昼の部屋」という題の詩が二篇ある他、「雨／ちんたいした／ひるの部屋」[7]や、「ぬるい昼の部屋は窓から明りをすすつて／私のかるい頭痛は静かに額に手をのせる」[8]など、詩中の言葉に至るまで、「部屋」が書かれるのである。「昼の街は大きすぎる」は、「自分の足」が「小さすぎる」と知る状況と同じく、「気がついた」様子を表しており「昼の街」が尾形の内側ではなく、外界にあることが認められる。「昼の街は大きすぎる」には異稿があり、秋元潔は尾形の推敲への執着を天沢退二郎との対談の中で語った。

たとえば『雨になる朝』に収録されている「昼の街は大きすぎる」の雑誌発表の時の題名は「昼は街が大きすぎる」で、「靴を履いてゐる足を見た」という雑誌発表の時の本文が、詩集では「私は歩いてゐる自分の足の小さすぎるのに気がついた」と書き換えられている。（中略）なんでそんなところにこだわるのか、その詩にそれほどこだわる値打ちがあるのか、どうもわからない。その詩のモチーフ、テ

ーマが重要だったんだろうけど。（「「水の中の水」の詩人」、「現代詩手帖」平成十一年十一月号）

異稿は昭和二年一月の「詩神」に発表されたもので、三行詩の中に「足が小さすぎる」と「電車位におおきくなければ醜い」という文も含まれている。詩集稿となった詩は尾形が抽出した二行であり、そこには秋元が推察に留めた肝要な「モチーフ」、「テーマ」があると考えられるだろう。『雨になる朝』の殆どの詩篇の制作時期は昭和二年であり[9]、書かれた時期が重なることからも、「「日本英傑伝抄と野村君」と私」を書く際「昼の街」の発想は尾形に内在していたと言える。年始めの抱負を語った「西暦一九二七年」（「亜」二十七号、昭和二年一月）という散文に尾形は「親切に見てもらひたい。数十年後こつこつと詩を書いてゐる自分の姿を考へると、私は暗然とするものがある」と綴っており、地道に詩を書き、報われない状況を嘆く様子は「自分の足が小さすぎる」という言葉と通じるものがある。当時の「自分」、乃ち尾形を囲む状況は昭和二年四月、「漫筆御免」（「詩壇消息」第一巻第四号）の中での痛切な叫びから想像出来る。

詩といふものがどれほどに価値のあるものかを疑はずには居れないこの頃ではないか。詩に疑ひをもちながら詩作することや批評したりするのは愚かしいことではなからうか。詩といふものは作るだけのものお互いに批評するだけのものであるなら——唯それだけのものであるなら、あまりにつまらな過ぎるのではあるまいか。お互に詩作はやめよう。誰がこんなことにしてしまつたのだ。と、言ひたくなるのは無理か。「詩には立派な生命がある。だが君達の作品はなつてゐないではないか」と言はれながら、私達の詩作は一生無駄働きといふことになるのか。／だが、不幸なことに私は詩を信じないわけにはいかない。

「こつこつと詩を書」いた末は「一生無駄働き」であったという悪夢の予期に「電車位の大きさがなければ醜いのであつた」という一行に込められた、他者の価値基準に左右される詩人の哀切が確認される。〈既成詩壇〉が〈旧詩壇〉と呼ばれるようになり[10]新興詩が盛んに作られ、新旧の詩人が喧騒の渦を作った当時の詩の世界が「昼の街」であり、詩人である自分が渦中の一員であることに気づいた尾形は自身の詩への態度を「足」に擬え「小さすぎる」と俯く。しかし、字義に反した感情を秘めていることは「醜いのであつた」という言い回しを用いて事実と距離を取っている態度から窺える。尾形は自分の「小さすぎる」足を捨て得ない。

「昼の街は大きすぎる」の「足」の論を「「日本英傑伝抄と野村君」と私」に転用すると尾形が、野村と自身が「大変異つた考えで詩に臨んでいることを述べていると分かる。現代詩の大きな渦に「日本英傑伝抄」のような奇抜さを以て臨む野村の描写に「野村君の足は野村君から独立してゐる」や、「私達が汽車にでも乗つてゐるやうに。野村君は足に乗つてゐるといふ

風に」という比喩を並べ、等身大の心身を以て詩作に臨む自身との差異を示した。尾形は批評文を書く際の立場を「私はうまい、うがつた批評とは離れて、むしろうまいうがつた批評にその不足な部分を反省してもらはふとするのです」[11]と語っており、資料Aも散りばめた比喩から浮かび上がらせる作業を経由して、「詩」の欠如を問うている。読者が比喩表現を解かない限りは、尾形らしい散文というベールを取らぬまま、野村への批判は見過ごされていくのである。

尾形の「日本英傑伝抄」への評価は、前号の「太平洋詩人」での「詩集『半分開いた窓』私評」での詩篇毎の批評、『三角形の太陽』批評の予告をふまえ、当の批評文の冒頭に「『日本英傑伝抄と野村君』といふ一文はうまく書けなかつた」という一文を記したことに尽くされている。「改題」となった経緯を語る第一段落は、緻密に最終段落と照応を成しており、野村の詩への期待を「魚のゐさうなところへ糸をたれた」と例え、冒頭の一文と鏡合わせのような「読者には気の毒だ、魚が釣れなかつた」で締めくくる厳しさは、「やき芋」、「氷水」、「汽車」や「足」の遠回しな比喩で緩和され得ず、主題を浮き彫りにするという、詩に通じた表現技法を痛烈に見せつけたのである。

続いて『全集』未収録資料Bを紹介する。

『尾形亀之助全集』未収録資料B

在郷詩人之図

尾形亀之助

この街には三四年前から循環線の電車がひけた。この電車に三十分足らずそのまゝ乗つてゐれば平均時速五哩のスピードは先に乗つた停留所へつれて来るのである。火事のすくない古ぼけたこの街も目ぬきの通はアスハルト舗装が出来て、三越支店は初めて広告気球を空に浮べた。ネオン・サインのカフエーもめつきりふえてサロン・ハロなどといふのと銀座会館などといふのが隣りあつてゐたりしてゐるが、未だに開演中に蝙蝠の飛ぶ芝居小屋もある。三越開店披露の名士御招待は食堂を開放し山とつんだサンドウヰツチ果物菓子は、正直に招待状一枚を一人限りのつもりで出かけた人達を嘆かした。其後、夏物陳列の御招待に今度こそはと一家全員昼食前の十一時半に出かけて、いきなり食堂へおしよせたが今日はこれとて饗応のある様子もないので「今日は何も食はせぬのか」と店員を驚ろかした幾組かゞあつたといふ。三越の進出には市内の中小商人は勿論絶対反対であつた。中でも福崎呉服店は市内はいふまでもなく県下第一を誇つてゐたのだからひどくその打撃を受けることになつた。黒木新之丞は福崎呉服店の真面目な店員で十四五年も勤めてゐるのだ。三越の広告気球をいち早く見つけたのはこの黒木新之丞でかゝへるやうにして店主を福崎呉服店の屋上へ引き上げ、気球を指さしてはらはらと落涙店主や其他を感動させたといふ。かうした真面目さは詩人としての黒木新之丞にも十分に現れて、商用のための上京の折りなどには寸暇を得てはよく大

家氏を訪問などして中央詩壇の状勢を探知するのであるが、幸ひ彼はシユール・リアリズムを彼の手法に取り入れなかつたが、年余に及んだマルクス研究には友人諸君を悩ましたのであつた。しかし黒木新之丞の思想は彼自身が食ふためには彼がマルクス主義者であつてはならぬことに到達して結婚後は一切口にせぬようになつた。彼は「すみれ」と「桃」との二人の子の父親として楽しい、すくなくも細君には意義のある生活をしてゐるのだと思はせるやうな一家をつくつてゐる。昼は店へ勤め、夜は明日にさしつかへぬだけの十時までを厳守して書斎の人となつて詩人の業を磨き、第一詩集「田舎の景色」出版後九年目に最近菊版半裁五十頁の第二詩集「街の角度」を出版した。第二詩集「街の角度」の出版は、彼が夜十時まで書斎の人となるといふのも雑誌「東北人」の同人である少年詩人達へ対しての応援のやうなものだと思ひ、彼が詩人であることを忘れてしまつてゐた人達を驚ろかした。

三月二日と期日があつて、黒木新之丞が常々口にする中央詩壇の諸先生の名前が発起人として四十余人列び、更に当地の二三の新聞社主や福崎呉服店の重役などの名の他にS市の歌人詩人が三十人ばかりが選れて、出版記念会の通知のはがきには実に百余人の人名に埋つて配達された。定刻には会場であるレストラント・ムーランの階段下に三々五々と下駄が列んだ。黒木新之丞はこの日フロツクコートに縞のワイシヤツそれにチヨコレートの靴といふいでたちで二階入口の受付に突然と藤の椅子に座つて、見たこともないやうな黒木新之丞になつて来会者の一人一人に固い握手をして迎へてゐた。控所から会場へ入つたのは定刻を二時間余も過ぎてゐた。おそらく黒木新之丞は会費五十銭と張り出した受付のそばに三時間はたつぷり座つてゐたのだ。会場の五十ばかり用意された椅子が半分に減らされた。そして椅子の前に列らべられてゐた椅子の数だけの菓子とみかんとバナナ半分を組合せた皿も順々に運び去られた。菓子やみかんはいゝとしても半分に斜に切られたバナナが運び去るのを見てゐる人を困つたいたましい気持にさせた。黒木新之丞はと見れば、取りかたづけの手つだいでもしてゐたのかいくぶん上気させた顔をして、花を飾つた彼の椅子を中心に集まつた席に着きかねてか不自然な声をたてゝ笑つたり、足りない灰皿を取りに行つたり詩集「街の角度」を四五冊をほどよくテーブルにくばつたりしてそはそはしてまだ立ち歩いてゐる司会者がゐないのだ。で、いが栗頭がたのまれて立つた。

「えゝ、大変遅くなりまして申しわけがありません。来ない人は来ない人として、必ず来る人があるのですが、来た人だけで始めることに致します。今晩はお寒むいところを友人黒木君のためにご来会下さいまして発起人としまして――」と言ひかけると、そばのが

「こゝにゐんの皆発起人だべつちや」と不遠慮に小声を出した。司会者は黙つてゐろと叱つて怒つてそのまま座つてしまふと、どう感違ひをしたのか黒木新之丞唯一人がそれに拍手をした。彼は「満州派遣軍万歳」といふ七五調の勇ましい長詩を満州派遣軍へ贈つた石井朝翠先生と詩壇の今昔に就て話してゐたの

だ。幾はいでもお換りをしますといふコーヒーが出て
「私は新之丞の叔父でありまして――」といふやうなのなどが交つて自己紹介が始まつた。有名な「天地無情」の著者石井朝翠先生は四十年以前の詩壇をひとり言のやうに語つて「天地無情」でそのときもらつた二十円でフロツクコートを作りました今でも未だ着てゐますと話した。
「先生あれは何百版か出てゐるのでせう、それでその時の二十円だけなのですか」と黒木新之丞がむきになつてきくと、先生は大きくうなづいて「さうです」と答へ、黒木新之丞は五十部を初版に残りの百部を再版にした「街の角度」がどんなことで幾百版が重ならないとは限らないと夢のやうになりかけてゐると、昨年の春頃から帰つてゐる詩壇奇人変人伝などには必ずひき出されるKといふ男が自己紹介の番になつて立ちあがつてゐた。
「……黒木君の詩は以前の詩より下手になつて来てゐる。これは黒木君が以前よりも黒木君らしくなつて来たことを意味することであつて、黒木君にとつてもわれわれ友人にとつても大変安心なことで、又、例へ黒木君の詩が以前にましてすばらしくなつたからといつても黒木君が詩人でゐなければならぬ理由を発見することは大変困難なことであるのです。仮に黒木君が詩人でない又は詩人をやめるとしてもおそらく誰一人痛痒を感じないのではないかと思ひます。勿論このことは黒木君一人にあてはまることではなくおそらくどの詩人へもあてはまることがらなのでありますが、黒木君には特に以上のやうなことを申上げたいと私は思ふのです。出版記念の会に縁起でもないと思はれると思ひますが、突然な「街の角度」の出版にびつくりして、うつかり右のやうなことを言つた。――と解釈していたゞくことにします」と、Kが席に着くと兎に角話が終つたのだから拍手があつて次の自己紹介が立つた。その男は自分は黒木と小学校が同級で以来親交をつゞけて来てゐるが詩のことはわからない。と名前と勤先を言つて座つた。それからつきつぎ(ママ)と自己紹介が廻つて行つて終つた。一人元気さうな男がKの言葉に喧嘩でもしかけるやうな調子で、黒木新之丞の詩を口をきわめてほめ彼のやうな詩人は日本ばかりでなく世界にだつてたんとはゐないと、ひどい訛で誇張してのほめ方がお可笑しいといつて声を出して笑ひこける者などあつて、黒木新之丞は一層からかはれてゐるやうなことになるのであつた。自己紹介が終るともう十一時近くなつてゐた。黒木新之丞はKなどに自分の詩がわかるかと思ふことが出来たがすつかり面白くなくなつてゐた。幾人も来て呉れなかつた「東北人」の同人も気になつたが、彼を崇拝してゐる少年詩人の前で思ひ切り辱しめられたやうなことを言はれたのはたまらなかつた。黒木新之丞は
「今晩は難有ふございました――」と、閉会をかねて挨拶をした石井朝翠先生は眠くなつて一足先に帰つて、最後に残つた七八人に黒木新之丞とKとが一緒になつて外へ出た。ビールを二三ばい飲むと、あまり酒に強くない黒木新之丞は酔ひかけた。
「君のいふ意味は僕にはわかるんだが他の連中にはわかんないから困るんだよ、僕にはわかるんだ」と黒木が言ふと、誰かゞ

「さうなんだ」と言ふのが聞えたが、Kは未だこんなことを言つてゐる黒木新之丞が気の毒になつたので、黒木とあと二人ばかり久しぶりで逢つたギリシヤ医学をやつてぶらぶらしてゐる男と貯金銀行へ出てゐる男とで何処かでゆつくり飲み直さうと思つたが、他の連中をまかなければならないので其処を出てカフエー以外は暗くなつた街を先になつて歩いてゐると、まかれる連中はゐなくなつたが黒木新之丞もゐなくなつてゐるのだつた。二三度呼んでみたが何処へ行つてしまつたのか、人通りが絶えて見透しのきく通りにはたゞがらんとして、黒木新之丞はもう何処にもこの世の中にはゐないのだといふやうに感じ、こそこそと露地から出て来た小犬を見つけて

「ゐた、ゐた」と言つたギリシヤ医学も、さう言はれてその小犬を見た貯金銀行もKも何んだか少し淋しくなつて、ギリシヤ医学は又大声で黒木を呼んだ。ひよつとしたら、こゝだといふカフエーに入つたが黒木はゐなかつた。貯金銀行が

「ひどいことを云ふんだもの――」とつぶやくと、女給が

「どうしたの、何云つたの」とうれしさうな顔をしてKのそばへ座つた。

【掲載誌】

「人物評論」（人物評論社）第一年第七号、一九三三年（昭和八年）九月、一三二～一三五頁

資料Bについて

「在郷詩人之図」は「人物評論」第一年第七号に「ローカルカラア小説集」の中の一作品として掲載された。前号の「人物評論」第一年第六号に「ローカル・カラア文学集」という名で始まった、地方を主題とする小説の特集が翌七号まで継続されたのである。六号では、北川冬彦―満州、田郷虎雄―長崎、徳田戯二―京都、神崎清―神戸、城夏子―和歌山、高橋新吉―四国、奥村五十嵐―熊本、江馬修―飛騨、七号では、久野豊彦―名古屋、細野孝二郎―岐阜、塚原健二郎―新潟、大江賢次―鳥取、尾形亀之助―仙台、本庄陸男―樺太、という組合せで十四名の文人が各々の居住地や縁のある土地を主題に小説を書いている。

編集人である大宅壮一はこの特集の新鮮さを自負しており、六号の目次に「各地方を主題にして、その土地に最も親しみ深い文壇の新鋭が書いた小説集だ。本誌独特の新プランを見よ！」と付し、「編輯後記」でも「次ぎに、本号の新プランとして誇りたいのは、「ローカル・小説集」地方を背景にした小説は多いが、地方を主題にした小説は初めてゞ、しかもこんなに賑やかに揃つてるんだから、描かれた土地に現在住んでゐない読者も、これによつて旅行気分や帰省気分を味ひたまへ！」[12]と読者に空前の企画であることをうったえている。六号「編輯後記」末尾の「特別原稿募集」欄に「ローカルカラー小説（内容、長さは本号発表のものに準ず）」とあることから、「在郷詩人之図」は依頼原稿ではなく、尾形の投稿によって「人物評論」に掲載

されたと推察する。

「在郷詩人之図」が発表される前年の昭和七年に尾形は仙台に帰郷し、東京に戻ることなく昭和十七年に他界した。尾形の妻、優が『現代日本詩人全集12』（創元社、昭和二十九年四月）に、「昭和四年五月、第二詩集「雨になる朝」を刊行致しました。その前年の年の暮、私は彼と一緒に暮す様になりましたが、その頃から彼は次第に詩作しなくなり、多くの詩友とも故意に遠ざかつて行きました」と書き、更に「詩作は「障子のある家」以後、歴程誌上にわずかに書いたのみです。環境に依つて書けなかつた事は、彼の場合、書かなかつたことの詭弁にならないと私は信じて居ります」と略歴を綴るところには、死に向かうに従って詩作意欲が乏しくなった詩人の図が自ずと浮かぶ。生前の尾形を知る伊藤信吉も、

> もともと『色ガラスの街』のおどけた表情は生の倦怠に発するイロニーというべきものだが、それが数年のあいだに、自己否定をさらにくぐりぬけたところの生の消亡の意識となった。ここまでくればいっさいが終末の意味しかもたない。残されたのは生の世界からの逃避であり消亡である。そこに死にひとしい意識がある。（『現代詩人全集（五）』、角川文庫、昭和三十五年十月）

と、「逃避」や「消亡」といった語で尾形の詩作後期を語っており、仙台帰郷後の尾形には詩への消極的態度が印象づけられている。尾形優が述べるように、帰郷後の尾形の著作は少なく、詩友に書いた追悼文と俳句を除いて、現段階で確認出来るものは十四点である。尾形が書いた最後の小説作品「在郷詩人之図」は詩と詩人を主題に、詩への態度が積極的に語られており、近しい者によってもっともらしく語られてきた詩への消極的態度の再考を必須とさせる。「在郷詩人之図」は、『尾形亀之助全集』（昭和四十五年九月）における秋元潔が分けた作品区分の「⑤」の、

> ⑤障子のある家以後（昭和六年～昭和十七年）――「詩人時代」「新詩論」「むらさき」に散発的に詩を発表したほか、「鴉射亭随筆」「宮沢賢治追悼」に追悼文を寄せた位で、「歴程」が創刊されるまで、ほとんど沈黙を守った。(13)

という記述を、発表年月（「歴程」創刊は昭和十年五月）から見た点と、「沈黙」とは言い難い程に詩境が積極的に明示された点において、見直させることとなるのである。秋元も晩年の尾形の詩作態度を消極的と見てはおらず、先の「⑤」の解説文を「「障子のある家」以来のテーマが反復されたが、絶筆となつた〈大きな戦〉〈雨ニヌレタ黄色〉にはいちだんと昇化した無気味さが漂い、新しい方向をさしているかにみえる」と結んでいる。秋元の尾形の作品への眼差しを受けて、永井敦子も「ただ尾形の評者秋元潔が繰り返し警告するように、詩人の酒浸り、引きこもり、無為を誇張するような知人や友人たちの証言にその作

品を重ね合わせて、そこに今風の投げやりな虚無感ばかり読んでしまうと、詩の創作に対する尾形の執着を見過ごすことになるだろう」[14]と警鐘を鳴らしているように、尾形の「無為」のイメージの真偽は問われ続けてきた。「在郷詩人之図」は「尾形の執着」を裏付ける『全集』未収録資料である。

「在郷詩人之図」本文冒頭は、「ローカル・カラア小説集」の他の作家・詩人の作品にも見られる書き出しで、久野豊彦は「名古屋のやうに、濃尾平野へぽツんと、一粒の種子のやうに、おツことされた街には、別に、これといつた名所のあらう筈がない」（「金の鯱」）と、細野孝二郎は「金津遊郭の入口の門の建つてゐる通りは、その赤い門を境界に、そのまゝまつすぐ、岐阜市内で最も繁華な街である柳ヶ瀬通りへ続いてゐるので（後略）」（「感慨無量――ある男の手記――」）というように、それぞれの地域の特色を織り交ぜながら小説を始めている。「在郷詩人之図」第一段落の、「地方色」も含めた時局的な描かれ方は「ローカル・カラア小説集」の作品の中でも際立っている。当時の仙台を象徴する街の変容の様子を巧みに抽出し、仙台駅を中心に昭和三年に開通した市電の環状線を皮切りに小気味よく叙述している。[15]「ネオン・サインのカフエー」については昭和八年一月二十八日の「河北新報」夕刊に、

> 現代人の感覚はネオン・ライトに吸収される、（中略）カフエーの装飾用から発達した仙台のネオン・サインは最早カフエーの独占的装飾を許さず、パン屋、菓子店、洋品店、呉服店、金物店、蓄音器店、薬局等々の店頭装飾に拡大利用され、昭和六年度中にネオン・サインの広告灯を取付けたものは市内に五十軒あり、逓昇変圧器の取付数は百二台あつたが、昭和七年に入つてから三十二軒を増し、変圧器の数量は七十八台を増加して今日では八十二軒となり、逓昇変圧器の数は百八十台を算してゐる、仙台市電では市内におけるネオン・サインの過渡期はもう過ぎた、この辺が飽和状態であると言つてゐる、[16]

という記事があり、電飾広告が目新しくなくなった実際の仙台市内の状況を、「めつきりふえて」の一言で描写したことが分かる。主人公黒木新之丞の登場に関わって紹介されるのは「三越の進出」である。当時の新聞に「三越仙台進出　阻止運動開始」（「河北新報」昭和五年四月二十三日）、「会議所の運動もつひに水泡に帰す　三越反対問題一段落」（「河北新報」昭和七年十二月二十六日）といった見出しの記事が書かれたように、本店を東京に構える株式会社三越の進出は、仙台の商店街を戦かせ、仙台商工会議所も含めた市内の商店の反対運動を抑えて成された。黒木新之丞の勤め先「福崎呉服店」のモデルとなったと思われる老舗呉服屋、藤崎呉服店は仙台随一の商業施設であり、常に近代的趣向を取り入れ、百貨店藤崎として市民に認識されていた。当時の様子は『仙台市史』に「三越の進出を見越した藤崎は、これに対抗するため、東一番丁と大町通りの角に鉄筋コンクリート造・地下一階地上三階建てルネサンス式の西館を建設し、

一九三二（昭和七）年一一月に営業を開始した。一方、三越仙台支店は東一番丁の北端近くに建設された鉄筋コンクリート造・地下一階地上五階建てのビルを店舗として一九三三年（昭和八）四月に開店している」[17]と書かれており、藤崎が三越に負けじとしていたことが窺える。昭和七年十月二十六日の「河北新報」は増築工事中の藤崎呉服店を記事にして「藤崎の陣容成る　四階建、屋上庭園も或る新館」という見出しを付けており、黒木新之丞が「福崎呉服店」の店主を抱えながら落涙した「屋上」が三越進出前に作られたモダンな装置の一つであったことを想像する。

黒木新之丞は在郷詩人でありながら「中央詩壇の状態を探知」することを欠かさず、その結果「シユール・リアリズム」ではなく「マルクス研究」を我が道としていたが、治安維持法により作家や詩人が検挙される時世から、断念を余儀なくされる[18]。抑圧の状況下で在郷詩人が出した詩集が「街の角度」であり、小説はその出版記念会の様子へと話が進んでいくのである。主人公の人物像から詩集名に至るまで、急進的な世相が反映されており、時世との密接さは尾形の他の著作に類を見ない。かつて座談会で詩の題材が談義となった際、尾形が「例へばツエツピリンを見たからツエツピリンの詩を書くといふことをしない。それらのことはむしろ嫌いてゐる」[19]と述べたことを踏まえると、「詩」の領域を時事が侵すことを良しとしない尾形が、「在郷詩人之図」に社会の変容が濃密に絡む書き出しを提示したことに、小説という表現媒体を用いて言わんとする何かがあったと推察するのである。

犬になる――「黒木新之丞」の消失

「黒木」という姓は、宮城県北部栗原郡（現栗原市）の領主で代々伊達氏の寵臣であった黒木氏と同名である[20]。尾形に作為があったかは分からないが、小説中の黒木新之丞は誠実、真面目でありながら、あくまで華がなく、滑稽で、小説中終始哀切が漂い、伊達氏に仕える身であった黒木氏を思わせるごとく、権威への従属が見られる。黒木新之丞の綿密な描かれ方は小説主題の如何なる部分を担うであろうか。

出版記念会での黒木新之丞の服装についての表現は、室生犀星の詩集『鶴』（素人社書屋、昭和三年九月）を批判した際にも用いられている。『鶴』の中に収められた詩は文語調で書かれる叙情的なものであり、尾形には受け付けられなかった。『鶴』の詩篇を読んだ尾形は、犀星に「どうすれば偉くなれるか――といふ焦燥、遅れまいとする焦燥」を感じ、加えて、

> 又、この人の焦燥はこの人をして袴にチヨコレート色の靴（黒でないところがハイカラの意）絹の靴下といふ姿で街を歩かせることになるのである。[21]

と比喩を用い、「焦燥」によって身にそぐわないものを意匠として見せていることに異和を唱えた。黒木新之丞も「フロツク

コートに縞のワイシャツそれにチヨコレートの靴といふいでたち」であり、『鶴』評に明らかになっている尾形の含みを転用すると、チョコレート色の靴は「ハイカラ」であろうとする者の「焦燥」の象徴と捉えることが可能となる。同じ「焦燥」であっても黒木新之丞の「チヨコレートの靴」は、作者が小説中の主人公に犀星の受け売りをさせた、または、大家の真似事を臆さない主人公像を固める一つのアイテムであり、詩人のすべき装いと信じて履いた新之丞の「真面目さ」が読者に伝わるも、果たして「詩」を秘めた詩人であろうかという疑問までも細やかに呈している箇所である。

結末部で姿を消した黒木新之丞は「もう何処にもこの世の中にはゐない」感触を小説の内外に残し、入れ替わりのように現れた小犬が「ギリシヤ医学」によって新之丞に見立てられ「ゐた、ゐた」と言われている。尾形の作品に犬が繰り返し登場することを指摘した上で秋元潔は「亀之助に於て、犬は性的なもの、過ぎ去りしおぞましき時を表しているように思います」(「安西冬衛と尾形亀之助」、「関西文学」第十四巻第四号、昭和五十一年五月、傍点原文)と述べている。尾形の詩篇には「さびた庖丁で　犬の吠え声を切りに／月夜の庭に立ちすくむ」(「夜半　私は眼さめてゐる」)[22]、「私は雲の多い月夜のあはれなさけび声をあげて通る犬の群の影を見たことがある」(「犬の影が私の心に写つてゐる」)[23]、「馬が大きい体をしてゐるだけに私の眼についてしかたがない／それには犬を大きくして馬に換へるのが一番よいのではなからうか」(「初秋」)[24]といったように犬に関する不気味なイメージが繰り返し書かれている。小品「犬の化けもの、躑躅、雀、燕」[25]はタイトルに含まれていながら、犬の登場は「向ひ隣の家の犬はよく吠えるが鎖でしばつてある」という叙事的に暗喩がほのめかされる一文と、「昼寝をして首のない犬をつれて散歩をしてゐる夢を見たりするのだが、風呂に入る機会がなかつた」という薄気味の悪い夢の描写の二箇所にとどめている。普遍的に人の意識下で捉えられている「犬」を従属的で哀れなものと認識し、その抑圧から、叫ぶごとく吠える姿を自己の意識下に置いた尾形は、「犬」を鼓舞するかのように、哀れさを抉りだして言語化しているのである。シナリオ「口笛の結婚マーチ」[26]にも、犬になる主人公が描かれる。引用は、恋人関係にあった「彼」と「彼女」に、それぞれ新しい恋人「A子」と「B」が現れ、「彼」が夢の中で「彼女」の「B」に対する媚態を目の当たりにした場面からの続きである。

A子彼の体に寄りかゝつてゐる。
▲彼眼をつむつてA子に接吻する。
▲A子テーブルの花を折つて彼の胸にさす。
彼マツチを拾はふとしてこゞんだ拍子に、彼はダブツてゐる。
一匹の犬になる。
▲犬になつた彼はそのまゝうなだれてカフエーを出て行く。(犬はあまり立派な犬でないこと)
——彼が犬になつた後はA子やBや彼女を写さずに、カメラはカフエーを出て行く犬を追つて客の足もとやテー

ブル椅子の下部のみを写す。

▲うす暗くなつたまゝ（溶暗を途中で止めてゐる）犬の出て行つた後のカフエーの入口から見た街路。――

（間）――ひきかへして来て、カフエーの前を通る犬。

（溶暗）

※場面展開を表す「▲」は原文通り。

犬が吠えるように、「彼女」と「B」への反発感情からの流れで為される「接吻」を引き金に、惨めさの自認によって「彼」は犬になり、「うなだれて」歩く目線に合わせカメラも自ずと「下部のみ」を写すこととなる。溶暗を止めてまで描いた、犬が引き返して来る様子は「在郷詩人之図」の黒木新之丞がうだつがあがらないにも拘わらず、上京する度に大家を訪れ「中央詩壇の状勢を探知」していた姿や、出版記念会が始まっても「石井朝翠先生」との会話に余念がない様子と重なる。「街の角度」というタイトルの詩集に対して「下手」であると同時に「以前よりも黒木君らしくなつて来た」というKの指摘は、社会状況に合わせて流行を追い近代的に傾斜していく街をここぞとばかりに捉えて詩集とした黒木新之丞に内生する、新しいもの、強いものの勢力に紛れ込む習性への皮肉である。他の友人が同情的な賛辞を続ける中で黒木新之丞はKの言葉を理解し、公衆の面前で「犬」的な媚びを自認せねばならない瞬間を迎えた。他者の目に映る自分の態度を認めたと同時に、滑稽な姿を「黒木君らし」いと言われ、本来の「黒木新之丞」が何者であったかに新之丞は思いを巡らす。真面目に、疑うことなく、時に辛酸を舐めながら知らずして「滑稽」に徹してきた新之丞に、「黒木新之丞」を探すことは出来ない。尾形は小犬の描写によって黒木新之丞に重ねたある種の詩人の、目も当てられぬ惨めさを表したのである。

尾形亀之助と二人の詩人――「黒木新之丞」と「K」

「在郷詩人之図」の核となる箇所が、出版記念会でのKの発言である。

> 黒木君の詩は以前の詩より下手になつて来てゐる。これは黒木君が以前よりも黒木君らしくなつて来たことを意味することであつて、黒木君にとつてもわれわれ友人にとつても大変安心なことで、又、例へ黒木君の詩が以前にましてすばらしくなつたからといつても黒木君が詩人でゐなければならぬ理由を発見することは大変困難なことであるのです。仮に黒木君が詩人でない又は詩人をやめるとしてもおそらく誰一人痛痒を感じないのではないかと思います。勿論このことは黒木君一人にあてはまることではなくおそらくどの詩人へもあてはまることがらなのでありますが、（後略）

Kが黒木新之丞を介して述べることは、尾形が詩に対して取

る距離感と態度である。引用部のKの発言の前半は批評文「詩集「第百階級」に依る草野心平君其他」（「詩と詩論」第三冊、昭和四年三月）の書き出しと意を同じにするだろう。

草野はきつと詩を書くことが下手なのだらう。だが草野はそんなことに一向無関心であつていゝ立場をもつてゐる。全くのところ草野は所謂詩人でなくともいゝ筈だ。また、例へ詩が下手であつても草野の現在のそれらの作品は十分以上にわれわれの仲間に通用している。

『第百階級』には、草野心平が度々題材とした蛙の詩篇が多く収められており、その中でもよく知られる「冬眠」[27]も収録されている。尾形は同批評文中「詩集の中であまりりきんだ詩はその他の詩に劣る」（傍点原文）と述べ、「蛙冬眠」は黒丸でいゝにはいゝが、草野はもつとよい詩を書かなければいけないではないか。苦心した作品が、必ずよいわけではないが、あれだけで手をひいてしまつたことは断じていけない」（傍点原文）と、「冬眠」を批判した。当時においても斬新で、時を経た今日においても多くの人の目に触れているであろう「冬眠」への批判的な評文を読むことで、尾形の評語における「下手」が、「詩」以外の奇抜さや詩型が前面となって読者に伝わる詩に向けられていることが分かる。黒木新之丞と異なり、草野の詩が「われわれの仲間に通用する」のは、草野があらゆる評言を受けようとも「一向無関心」に、蛙を書き続ける人物であり、世間的に詩人と認知されていてもいなくとも、尾形にとって草野は言葉に表すのも厭うほどに「詩人」であるということである。黒木新之丞は詩の傾向、流行に無関心でいられぬ人物である。しかし、尾形が思うところの草野心平と黒木新之丞の間にある明らかな違いが、社会においてどの位認識され、重要さを持っていると言えるだろうか。Kは、詩人達が客観的視点を内面化して密かに繰り返している煩悶をあえて言葉にする。広義において詩人は詩人を名乗ることで役は担われ、社会では事が足りているという現実を発言の後半部で詩人達に突きつけた。北川冬彦との論争においても、「結局、くだらん男とくだらん男との言ひ争ひでしかない。俺にしても君にしても、現在是非世の中にゐてもらはなければならない有用の人間ではない。多少は有用であるとしてもかけがひはいくらでもあるのだ」（「馬鹿でない方の北川冬彦は「読め」」（「詩神」第六巻第二号、昭和五年二月）と述べており、詩人の集まりによって形成される狭義の価値基準によって詩に甲乙が付される実状と距離を保ち、詩人の枠組みの外から批評の眼差しを自己に向けることに徹底した。客観における「詩人」に個々の差はなく「詩人」でしかないことを、尾形は詩作を盛んに為していた時から心得ている。昭和二年に書かれた「電車の中で」は、午後三時の電車の車内で「若き詩人」、「美しき婦人」、「花を持てる老年の男」の三者に焦点を当て有り溢れた乗車風景を映した、ごく短いシナリオである。主人公の詩人が降車し、映画も終結した後、「13」から資料B同様の暗喩が展開される。

13　終り（タイトル）
14　カフエーに入る詩人。
15　カフエーの中には彼の詩人と全く同じ服装同じ顔をしてゐる彼の友人が五六人ゐて、彼の詩人はその中にまぎれこんでしまふ。そして、誰が誰であつたのかわからなくなつてしまふ。
16　酒を飲む者、詩作してゐる者、其他色々――。（ひとゝほりカフエーの中を写した後は、かの詩人のまぎれ込んでゐるか彼の詩人の友人達のみを写してゐること）
17　やがてカメラは、その中で一人ぼんやりしてゐる男を見つける。彼がそれなのである。
註。13の「終り」（END）といふタイトルをそのまゝ入れて置いて、14から17までを加へるのです。(28)

「14」から「17」に描かれた詩人の同化が「END」とともに映し出されることは「註」で念を押すほどに確固とした尾形の真実である。昭和二年当時、既に、シナリオ本編ではない端の「誰が誰であつたのかわからな」い集団として、尾形は詩人を捉えていた。嘗ての尾形は「一人ぼんやりしてゐる」役で詩人仲間との差異を自負できたかもしれないが、継続される詩人の同化の現象は、社会が多忙を極めるほどに悲惨となった。北川冬彦に言葉を放った時以上に、誰が詩人で誰が詩人でないかについて「誰一人痛痒を感じない」という状況を尾形は「在郷詩人之図」に照らし出すこととなったのである。

「ローカル・カラア小説集」に投稿しながら、尾形は「在郷詩人之図」を「ローカル」に寄り添うものとして書いていない。石川善助に寄せた追悼文中に「彼ばかりではなく、ときとしての反都会人としての感情での作品は常によくない」(29)（「石川善助に」、「鴉射亭随筆」昭和八年七月、傍点原文）と語るのは、詩を「詩」以外の「反都会人としての感情」という邪気を用いて書いたことへの反発である。黒木新之丞がKの指摘に対して「他の連中にはわかんないから困る」と、なお他者の価値基準に振り回されている様子はKの「気の毒」という評言以外の何物でもない。Kが尾形であることは、作品中の一度の発言からも明らかであるが、対の位置に黒木新之丞を立たせることは出来ない。新之丞が尾形が目にしてきた多くの詩人であることは相違ないが、尾形との間に境界線を引くのは早計である。近代化する街並みが象徴する資本化とその影、戦時下へと進む情勢、治安維持法による言論統制の抑圧の中で、詩が「下手」な黒木新之丞が持ち前の真面目さだけを頼りに詩が入る隙を見つけ、出版したのが「街の角度」である。Kのように詩の有用性に疑問を持ちながら、尾形は、動き続ける社会の中で「詩」による詩作を自身の中に絶えず見出し続けた詩人であり、傾斜していく街に詩の居場所はあるのかという苦悶が、黒木新之丞の詩集「街の角度」刊行に形を変えて表れたのである。「在郷詩人之図」に特出されるのは、黒木新之丞という詩人の丁寧な描写である。尾形が他の詩人の中に「黒木新之丞」を見出し得るのは、自身の奥底

にも「詩」でないものに流れる怠惰、楽観性が息を潜めているからである。それでも詩を書く尾形亀之助がKであり続けたことを高村光太郎は記している。

> 彼は自分の詩を絶対の場に於いて僅かに書きとめた。その背後には書くに及ばないと彼自身が見なした厖大な詩量があることを私は知る。世上に在る多くの詩の如きは彼にとつて殆と書くに及ばない詩なのである。(30)

光太郎が認識する「書くに及ばない」詩こそ「黒木新之丞」であり、裁断の刃を下ろす「彼自身」はKである。「ローカル・カラア小説集」という特集の中で黒木新之丞という在郷詩人の批判を描くのは、詩人が自身の稀少性に同情し「詩」を後回しにする詩作を常習とすることへの反発に、「地方」が好例であったためである。五階建ての三越の建設に詩が場を明け渡したり、変容したりすることは更なる詩の衰退を招く。大宅壮一は「人物評論」創刊号の後記で「電車の中でも、昼休みの時間にでも、ちよいとポケツトから取り出して、あちこち拾ひ読みしてゐるうちに、人物を通じて社会の動きがわかるといふのが、この雑誌の建前だ」と語っている。しかし、「在郷詩人之図」は社会を通じて、詩人を理解する作用が強い。尾形は満を持して、自身に内在する二人の詩人を見せた。詩作において拒絶する時事を小説ではすべて生かした上で、主題が詩の一点を動かない頑固さが改めて確認され、執筆面、精神面でも「消亡」の評価がぬぐい去られるであろう。

終わりに

本稿で紹介した資料A、Bは尾形の年譜の上では、執筆時期に大きく差がある。「「日本英傑伝抄と野村君」と私」が書かれた昭和二年は尾形が最も詩作に意欲的であったといっても過言でなく、「太平洋詩人」の他にも「亜」や「銅鑼」等の雑誌に発表を重ね、念願であった映画評も書いた、充実した年である。「在郷詩人之図」が発表された昭和八年は、尾形の周りでも、石川善助、宮沢賢治が亡くなり、社会的惨事としては小林多喜二の獄死もある。暗澹たる社会と心中に尾形の著作数は激減している。

対照的な年に書かれた二点の資料は、年月を越えてもなお尾形の詩への態度が一貫していることが示されている。資料Aでの「日本英傑伝抄」を詩として認め得ない様子は、資料BでKが「街の角度」と黒木新之丞に呈した苦言と、発信元を同じにするであろう。滑稽味や斬新さ、突飛と奇抜さは、それ自体に惹かれて詩とした時、作者の邪気が「詩」を抹殺する。天沢退二郎は尾形に邪気と無邪気の認識があったことを推察する。

> たとえば小学校に入るか入らないかくらいの子どもの詩をみてみると、大人だけが感心するような非常に無邪気な詩があります。ああいう無邪気さとは対照的に、詩を書くこ

とで有名になりたいとか、ものごとの本質に迫りたいというような、浅ましいというかいじましいいろいろな邪気があるわけです。（中略）詩を書くことの邪気も無邪気も耐え難くて、しかしそのなかでできるだけ耐え難くないことだけをしようと尾形は思ったわけでしょう。(31)

「日本英傑伝抄」を書く野村は邪気とも無邪気とも言う事が可能であり、判別しがたい。黒木新之丞も同様である。幸いにも詩は邪気でもなく、無邪気でもなく「詩」であり、尾形は逃れるごとく、収まるごとく、よい詩を書くことへの追求によって「耐え難くないこと」を見出した。黒木新之丞のような詩人が絶えず変局する社会の中で詩の場所を探していたとき、尾形は認知された邪気と無邪気に圧迫されながらそれらに依拠した衝動を捉え、自身の中から書くべき「詩」を正確に摑むことに徹底した。

尾形亀之助の批評は自己に徹底することを以てなされる。尾形の自己はよい詩への追求である。目に見える言葉の繋がりを抜き去り、飛躍した言葉をならべ、秘めた規則性を提示する批評そのものが、言葉を用いることの醍醐味を知らしめる。揺るぎない詩人の姿は批評の体現であったのだ。

【注記】

1　尾形亀之助の全集は『尾形亀之助全集』（思潮社、昭和四十五年九月）と増補改訂版『尾形亀之助全集』（思潮社、平成十一年十二月）の二冊がある。未収録資料を扱った本稿では『全集』で二冊を指し、必要に応じて出版年を付して区別する。

2　野村吉哉（一九〇三～一九四〇）京都市生。三歳で親戚の元に養子に出され、幼少期を関西と満州を往復しながら過ごす。十五歳で上京し、大正十一年頃から職工をする傍らで詩と童話の執筆を始める。大正十二年「中央公論」（大正十二年六月）に「プロレタリア作家とその作品」を発表し、文筆活動に専念する。ダダイスム詩運動に参加し、「ダムダム」に詩を発表。生涯脅かされた貧窮と病魔が独特のプロレタリア詩を生む根源となった。肺結核のため三十七歳で他界。詩集は『星の音楽』（さめらう書房、大正十三年十月）『三角形の太陽』（ミスマル社、大正十五年六月）の二冊がある。

3　尾形亀之助「詩集『半分開いた窓』私評」（『コレクションモダニズム詩誌第二巻アナーキズム』ゆまに書房、平成二十一年五月、三六七頁）※初出「太平洋詩人」第二巻第二号、昭和二年二月

4　岩田宏『野村吉哉作品集　魂の配達』（草思社、昭和五十七年九月、四〇六頁）

5　壺井繁治「『三角形の太陽』を読んで」（『復刻版文藝時報』不二出版、昭和六十二年十二月）※初出「文芸時報」大正十五年七月二十五日

6　尾形亀之助「昼の街は大きすぎる」（『尾形亀之助全集』思潮社、平成十一年一二月、一三四頁）※初出『雨になる朝』誠志堂、昭和四年五月

7　尾形亀之助「昼」（注6に同じ、一七八頁）※初出「玄土」第三巻第九号、大正十一年九月

8　尾形亀之助「昼　床にゐる」（注6に同じ、六八頁）※初出『色ガラスの街』恵風館、大正十四年十一月

9　『雨になる朝』の後記には「こゝに集めた詩篇は四五篇をのぞく他は一昨年の作品なので、今になるとなんとなく古くさい」とある。

10　春山行夫は「ポエジイとは何であるか――高速度詩論その一――」（「詩と詩論」第二冊、昭和三年十二月）の中で、一九二八年版「詩人年鑑」に関わる詩人集団を「旧詩壇」として批判している。尾形に至っても、詩話会を受け継ぐ形で昭和二年十二月に結成された「詩人協会」に対して「全詩人聯合」を結成、発起人となっている。「全詩人聯合」創刊号（昭和三年四月）には、草野心平、大鹿卓、高橋新吉、三好十郎等が「詩人協会」に属する「所謂大家」（三好十郎「交代期の詩」）への批判文を書いている。

11　尾形亀之助「「検温器と花」私評」（注6に同じ、三〇六頁）※初出「太平洋詩人」第二巻第一号、昭和二年一月

12　大宅壮一「編輯後記」（『復刻版　人物評論』第一巻、不二出版、平成八年十一月）※初出「人物評論」創刊号、昭和八年三月

13　増補改訂版『全集』では⑤の時期の「足のない馬」（「獣滞」昭和八年一月）と俳句「枇杷の果」（「蕉舎句帳」昭和十年五月～昭和十一年一一月）が加わった。

14　永井敦子「尾形亀之助――障子のなかの宇宙」（「ソフィア」五十三巻四号、平成十七年十一月）

15　『仙台市史通史篇7』（仙台市、平成二十一年七月、七四頁）

16　『仙台市史資料編7』（仙台市、平成十六年三月、三五～三六頁）該当箇所以降「河北新報」の引用は同書による。

17　注15に同じ（一一三頁）

18　松尾洋『治安維持法――弾圧と抵抗の歴史――』（新日本新書、昭和四十六年十一月）

19　「詩神第三回座談会」（「詩神」第六巻第八号、昭和五年八月）

20　『宮城県百科事典』（河北新報社、昭和五十七年四月）

21　尾形亀之助「詩集『鶴』を評す（主としてその読者のために）」（注6に同じ、五〇八頁）※初出「氾濫再刊号」昭和四年十月

22　注6に同じ（一三三頁）※初出『色ガラスの街』前掲

23　注6に同じ（四八頁）※初出『色ガラスの街』前掲

24　注6に同じ（二〇一頁）※初出「銅鑼」大正十五年月発行月不明

25　注6に同じ（四一七頁）※初出「文学祭」六月号、昭和二年六月

26　尾形亀之助「口笛の結婚マーチ――「人生興奮」その三として――」（注6に同じ、四五二頁）※初出「映画往来」第三巻第四十号、昭和三年四月

27　「冬眠」は「●」という一篇の詩。（『草野心平全集』筑摩書房、昭和五十三年五月）

28　尾形亀之助「電車の中で――喜劇風のシナリオ――」（注6に同じ、四二一頁）※初出「映画往来」第三巻第十一号、昭和二年十一月

29　尾形亀之助「石川善助に」（注6に同じ、三七九頁）※初出「鴉射亭随筆」昭和八年七月

30　高村光太郎「尾形亀之助を思ふ」（『高村光太郎全集第八巻』筑摩書房、昭和三十三年一月、二七八～二七九頁）※初出「河北新報」昭和二十三年十二月

31　天沢退二郎・秋元潔対談「「水の中の水」の詩人――尾形亀之助の詩と真実」（「現代詩手帖」平成十一年十一月号）

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程二年）